

優秀賞

住宅の部

建築主：森田 元彦・篤子
設計：佐藤 文 + 鹿嶋 信哉 / K+Sアーキテクト
施工：スターツCAM株式会社
所在地：流山市東初石5丁目

敷地境界線が住人みんなの屋外リビングに

かぜの小路



家並みが連なる外観デザイン 緑あふれる街となるよう外周部に極力樹木を配した

(撮影/上田 宏)

つくばエクスプレス「流山おおたかの森」駅周辺で開発の進む住宅地の一角にある賃貸アパートである。4筆、計2,000㎡弱の宅地を一体的に計画し、各筆に2階建てを1棟ずつ建築している。「小路」とは、4m幅、長さ50mほどの棟間のことである。この小路を挟んで、両側に2棟ずつ建っている。A棟とB棟はともにファミリータイプで、各6戸が小路を挟んで向き合っている。バイクや車好きの人を想定したC棟5戸とDINKS世帯を想定したD棟6戸が向き合っている。

この賃貸長屋の看板は、緑豊かな「小路」。「子らが元気に遊んだり、テーブルを出してお茶を飲んだり、本を読んだり、おしゃべりしたり」、まるで絵本の中から飛び出してきたような住人みんなの屋外のリビングだ。

「小路」は、わずかに蛇行していて、野のみちを彷彿とさせる。防災井戸が、平時には子らの格好の遊び場になっているようだ。住戸の間取りが小路に開かれていて、子育て世帯にはうれしい。子育てコミュニティが自然にでき、近隣の子らもここに遊びに来るといふ。

棟間を走る「小路」は、敷地境界線をまたぐ

屋外の共用スペースである。それが実現すれば、どれほど豊かになるのかを示してくれている。これが先例となって、広がることを期待したい。

高齢化社会が通奏低音である日本にあって、つくばエクスプレスの沿線地域では子連れの家族を多く見かける。真っ新たな土地にまちをつくる希少なチャンスなのだから、例えば「かぜの小路」がささやかながら挑戦しているように、敷地境界線を顕在化させないまちづくりをもっと思い切っできてできなかったのだろうか。 (岡部 明子)



屋根の形が住戸内にも表れている
中庭を挟んで対面の家並みが見える



住人の屋外リビングと位置付けた中庭
各住戸のリビングから子供の様が見守れる
(撮影/上田 宏)